

宮古，大神島のウヤガム信仰

大神小中学校教員



ウヤガム信仰の場

本論に入る前に私がウヤガム信仰に触れるまでの過程を述べておこう。

先づ私の赴任地である大神島の紹介をしておこう。大神島は宮古島の北部即ち狩俣部落から約4 Km 程離れた海上にある。この島はどこから眺めても三角形に見えるところがおもしろい。富士山を小さくしたような感じのする小島だ。私は狩俣部落の遠見（トウミと発音する）という断崖から小さく高く聳える大神をしばらく凝視した。あれがぼくの最初の赴任地かと念を押すように遠見にたたずんだことが昨日のように浮んでくる。この

孤島に渡るには現在はサバニと呼称する刳舟のような小舟が使用されている。速いもので大体15.6分程度かかる。干潮時には約200メートルも舟のところまでぬきあしで足で歩かねばならない。こうしたまるで20世紀の今日とは思えないような原始的で単調な生活が、あの乾いた大都会のビルの谷間の血色のよくない人間には味えない生の歓びを喚起させる。島に近づくとき人を寄せつけぬ様なきびしくそり立った岩が目に入る。それらの岩の間を縫うようにして通り抜けると小さな栈橋がみえる。これがこの島の表玄関である。そしてその栈橋の右上の方に大神小中学校が白くみえる。児童、生徒総数52名、職員5名、3教室ほどの大きさの校舎が東西に建っている。近代生活の支柱となっているこの小さな学校と数える程の部落民の生活を内容として、孤島大神島が存在するのである。こんな僻地の教育に魅力と情熱を感じて渡ってきた訳であるが、それよりも私はこの島に根深くしみこんでいる彼等島民の信仰に興味を抱いたのである。3年前、琉球政府が移民政策を講じたにもかかわらずいまだに半分が島に生活している。生活は決して楽ではない。全くその日暮らしである。

しかし彼等は島を離れようとはしない。色々の理由はあるにしても、その中で最も彼等を島に引きとめるのはウヤガム信仰の力であると私は推測する。では一体そのウヤガム信仰とはいかなる性格のものなのであるうか。この信仰の研究に來た

者は、まだ誰れも成功していない。それは島民が自分達の信仰を深く研究させないからである。例えば祭があっても、見学はできるがウヤガム達のいう歌の一つ一つの意味をうかがってそれを記録しようとするれば、神様があなたをのろって身上に危険があるなどといって記録させない。祭の時、ウヤガム達は山の中に入ったきり、不眠で、絶食の生活を5日間も続けるのであるが、その山に男性が入るのはタブーとされ、研究者は勿論入ることは許されないのである。研究者に際してこれだけの壁がありますので、これから述べる私のウヤガム信仰論も信頼されえるものではないかもしれない。しかし我々教員に対して、島の人々は大部分信頼しているので、反面研究はある程度まで浸透することができた。

先ずウヤガムという言葉の意味であります、元来宮古島の方言で親のことをウヤといいます。恐らく親をオヤという発音のオバウに転じてそうなったものではないかと思うが、言語学者ではないのではっきりしたことは言えない。しかし親をウヤと発音するのは真实性100%だ。それから神のことをカムと発音する訳であるが、これも恐らく神をカミという発音から転じてきたものかと推測される。すなわちカミのミガムに転じて(こういうことばの変化を専門的になんというかしりませんが)カムという宮古の方言となったものと憶測できる。これもまた、言語学者ではないのでオーソドックスな説明にならないとおもうが、しかしまた神を宮古の方言でカムと発言するのも真実である。してみるとこの二つの体言で構成されたウヤガムはどうやら親神と解釈できないこともない。実はこの信仰は一種の祖先崇拜の信仰なのである。ウヤガムとだく音になっているのは、おそらくウヤガム、ウヤカムと伝承されているうちに発音しやすいようににどったのではないか。神

々のことを方言ではカムガムと発言することから推してもウヤカムがウヤガムになったのは当然のようにおもわれる。もう一方こういう綴り方もある。この島の名である「大神」のことを私達の先人たちはウガムという。ウガム(ウヤガム)信仰は大神信仰という推測もつく。いわゆる大神思想である。

ウヤガムには10名の年寄りの女の人がある。上の人々をウヤガムに選ぶのは島の人達であるがその継承は世襲制でなければ、特別に後継者もない。かといって資格制でもない。自然にウヤガムになるようである。ウヤガムになる人達はある特定の仏事とか、お祭の場合を除いて、ごくあたりまえの人である。

ウヤガムには先ず責任者という者がいて、30人で構成されている。責任者の家にはツノ皿といって神にお供えするニキ(ク)という神諭がある。それが代々伝えられて、今では大神の教になっている。即ち責任者だけは世襲制である。この3人を主体に神のおつげはウヤガム達によって第一次形式で伝えられる。組織は簡単にいうとウヤガムとこの責任者の3人で構成されているのである。これは人的構成である。

こうこつとしたウヤガム達は単調なメロデーと2拍子のテンポにのせ、女は次のような内容のことを神々に話しかける。家族8人の家族がありました。父1人、兄弟6人、ウナズ1人の家族である。或る時6人の兄弟がみんな父上の奇態に反感をいだき、ついに殺意までいだくことになった。それを察知していたウナズはどうにかしてこれらの6人の兄弟から父上を守ろうとする。

ある日ウナズは山へ行っている木のしるしでニキをつくり、それをさかづきに入れお祝いをした。何も知らない6人のものはそのさかづきをぐいとあけてしまった。そして6人ともみんな死んで

しまった。ヴナズは父上を救ったが、血をわけあった兄弟を殺してしまった。一体この自分の行為は神の目からすれば、どうなるだろうかと自分を責める。ヴナズはそういう判然としない自分の心

を安定させるため、殺してしまった兄弟の墓をし峰に立派に建立する。それで霊をなぐさめ自分を落ちつかせるというような事である。

(大神小中学校教員)